
People following order

柊睦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

People following order

【Nコード】

N1406E

【作者名】

柊睦

【あらすじ】

魔法学校に通う主人公とそのパートナーのラブパニックコメディ
I。

「ちょっと！ウィル。起きなさい！！」

大声で呼ばれたのに気付いて、俺は目を薄っすらと開けた。

「ちょっと、聞いてるの？返事くらいしたどうなの？」

「はいはい。聞いてますよ…」

「はいは一回！」

「へいへい。」

「へいでも駄目！もう、実習始まるわよ！置いてくからね。」

いつもの日課の昼寝をいつものようにメアリーが起こしに来て

（ちなみに、俺はダニエル・ウィルソン。さっき怒って俺を起こしたのが、メアリー・スミスだ。）

午後の授業がもう直ぐだとわかって、俺は伸びと欠伸をいっぺんにして飛び起きた。

ここ、ガルヴィッシュ魔法大学院では二人一組で授業を受ける。

なので、四年間はパートナーとつききりで授業を受けることにな

る。

ってことは、どちらかが単位を落とせば、

もう一人も単位を容赦なく落とされるとゆう連帯責任制の学校なのだ…

なので、必然的に成績が近いもの同士がペアを組まされる。

それと、属性が反対のものが組まされる。

まあ、これはまた後で、今はメアリーがキレないうちに早く実習室へ行かないとまたどやされる…

芝生で寝ていたので葉っぱが付いていたので燃やして汚れを払った。

庭を抜けるとやはりそこにメアリーが立っていた。

「いつも言ってるけど、そう簡単に魔法使っなくなって言ってるでしょ?!」

俺に顔を向けながら、まだ燃えていた葉っぱを消した。

「桜が燃えたらどうするの?」

「さあーな。」

「もう!いつも尻拭いしてるの私なんだからね!!?」

…ほらもう、さっきの答えが答えられる…

属性がなぜ反対でなくてはいけないのか…

答えは簡単。相手の尻拭いをするため。

聞こえが悪いな…うゝん。

格好良く言つと調和を保つためか…なんかこれもイマイチだが、まあ放っておこう…

で、説明だが、

俺が使った魔法の中和をメアリーがして、メアリーの魔法を中和するのが俺の役目だ。

俺たち魔法使いは世界の修復が主な仕事だ。

そこでも、パートナー制が適用されている。

だから、ここは社会に出る前の模範練習所と言ったところか…

だから、大体の奴がそのままパートナーを変更せずに仕事に就く。

まあ、また知らない奴と組まれるより、知ってかったるなんとかやらのごとく、

気の知れた奴の方がいいからな…

だが、問題が一つ、組まされたときの相手が悪かったときだ。

メアリーは他の奴と比べたら（俺より成績がいい奴なんていないが、）

成績も断然いいし、サポートも上手い。

だが、口煩いのだ…こんなことを考えていたら、知らず知らずため息を吐いていた。

「ちょっと私の話聞いてた?!」

「あ?ごめん…何?」

「ん〜!もう!すっかりしてよ!今日の授業は進級に関係あるんだから、ちゃんとやってって言ったの!」

「わかったよ。俺だって落ちたかねーからちゃんとやるよ。」

「本当ね?!ちゃんとやらなかったら氷付けにしてやるから。」

俺は、はいはいと答えると、さっきと同じ押し問答が繰り返された。

授業はオゾンを作り出し、その化学変化したものを留める作業だった。

まあ、これは簡単な授業だった。

説明はって？自分で調べる。

直ぐに終わらせて、余った時間をまた寝る時間にあてがおつと教室から直ぐに出て行つた。

後ろからメアリーの声がしたが無視してまた、あの桜の下に陣取つて寝だした。

「先生。私属性変えたいんです…」

メアリーは、残った時間で先生に愚痴っていた。

「急にどうしたの？」

「だってあいつ、究極に我侭なんだもん！！それに私の気持ちなんて全然考えてもないし！」

机を拳でドン！と叩くと、言葉も一緒に叩き付けた。

「でも、何だかんだで上手くいってるんじゃないの？」

教師の前で堂々とお茶とお茶菓子で一服してるあたり、似たもの同士なんじゃないかと思つたが、あえて言わなかった。

「あなたに専攻を変えられちゃったら、ダニエルはどうするの？」

自分も熱い紅茶を貰つて砂糖をどばどばと入れたした。

「先生！それは入れすぎです！」

「いいのよ。これくらいで。苦いのは嫌いなもの」

「太りますよ…」

「…それより、話がずれてますよ。」

（語尾に怒りマークが見えるのは私の勘違いか…でも目が笑ってない…）

「ご…ごめんなさい！！でつでも！後二年もあるんですよ！？」

「ん〜。じゃあ、お灸を据えてみたら？」

「はあ、お灸ですか？」

「そう。お・きゅ・う」

で、そんな女の陰謀も知らずに、すやすやと寝ていたダニエルだったが、いつもと違う声に起こされた。

「起きやがれ！ダニエル！！勝負しろ！！」

目を開け、目だけで見るとそこに女が挑戦的な目で見ていた。

「あらあら、いつもいつも俺に惨敗している、ケイトさんではないですか？」

「なんだ、その言い方は！？」

「事実を在りのままに言っただけだろ。」

「問答無用！覚悟しろ！！」

「へっ、返り討ちにしてやる！」

そんな子供みたいな会話の後に、また子供の喧嘩のごとく周りも気にせず戦い始めた。

これが他人が判らないわけが無い。すぐにメアリーにも話が伝わった。

カマイタチをダニエルに放ちながら、ケイトは叫んだ。

「ちょっと！少しは本気出さないよ！」

大鎌でカマイタチを寸断し、ケロツとしながら

「へっ、お前みたいなのにいちいち本気出してたら疲れるだろ。嫌だね。」

それでブチ切れたケイトが周りの人や物を顧みず最大攻撃してきた。

「あっ、やべ……」

「ごちいゝん!!」

「あつ、やべゝじゃなゝゝい!!」

愛用の得物でメアリーはおもいつきりダニエルの頭を殴った。

「いってーな!俺を殴る前にあいつをどうにかしろよ!」

「大丈夫よ、あの子の相方も呼んだから直ぐに収まるわよ。」

言ったそばから、土が盛り上がりケイトを埋めた…

「…」

「…」

「だゝ!!そ、そこまでやることないんじゃ!」

「ちょ、ちよつと!?レオン!??やり過ぎでしょ?」

二人同時に叫んでいた。

「あつ、ねーさぁーん。」

メアリーに手を振りながらにこにここちらに近づく影あった。

「ちよつと、貴方!生き埋めにしてどうするのよ?死んじゃうじやない!」

盛り上がった土の前でメアリーはオロオロしながら、山を見上げた。

「大丈夫だよ。ちゃんと空洞作ってるし、空気の穴も見えないけどちゃんと空いてるし。」

これくらいのことしないと反省しないから…はあ…」

特大のため息を吐くとやれやれといった、ポーズをとりながらメアリに振り返った。

「ねーさんも大変だね。ほつんと相方が、頑固だと…」

「本当よね…貴方も大変ね。女の子なのにお転婆で、ケイトちゃんだけ？」

「ええ。ふう、属性を水に変えようかと思ってるんですよね…でも、俺がこいつと離れたら災害が増えると思うと、中々変えられないんですよ…。」

「わかるわ。従姉弟同士で同じ苦勞を背負ってるってわけね。」

「おい！！俺のどこが災害なんだよ！？それに俺抜きで話を盛り上げるなよ！」

「あのね？あなた自分がどれだけ他人に迷惑かけてるか解ってないでしょ？」

所構わず、喧嘩買っわ、売るわで！もう少し考えて行動したらどうなの？」

「あ？！何か？お前らみたいに『今日はどうしましょうか？』うふ

ふふふ。あははは。』

って感じの話し合いでもしろってゆうのかよ？馬鹿らしい！男なら売られた喧嘩は買わなきゃ腑抜けだ！」

「そう、それで私にも被害が出て宜しいと？」

「別にお前には関係無いだろ！」

「そう。だったら、本当に勝手にさせて頂きます。」

「え！？あわわ？！ね、ねーさあくん？」

ダニエルの言葉に、怒りマークと微笑みを顔に貼り付けながら教室に入っていた。

「あつ、謝らなくっていいんですか？」

「別にいいんだよ！五月蠅い奴が居なくなって清々してらあ。」

「…はあ。でも一応言っときますけど、ねーさん怒ると怖いですから…」

「あ？大丈夫だって、いつも怒ってるぜ。あんな風に。それにすぐに機嫌も直るしな。」

「そうですか？まあ、そこまで言い切れるなら。それはそうと、ケイト出してあげたいから、姿見えないところに行ってて下さい。」

「おう。じゃーな。その暴れ馬どうにかしろよ。」

ひらひらと手を振ると教室に入っていた。

「ほつんとく大丈夫かな？？あの笑顔のときの怒りって一番怖
いんだけど・・・」

ダニエルを見送って、見えなくなるとケイトを外に出した。

出した瞬間にカマイタチを食らって吹っ飛んだのは余談だが…

その次の日、ダニエルは屋根の上で寝ていたが、風が寒いと思って
ふっと起きた。

「で！？なんで日が沈んでんだ！？？」

寝たのは昼前。で、今は夕方だ。その間メアリーは来なかったのだ。

「なんで、今日は来なかったんだ？」

いつもはどこに居ようとも見つかって教室に引っ張って連れていか
れていとのだ。

（だから、留年せずに二年生をやっているのだ。）

メアリーが、起こしに来ないなんて前代未聞のことだったので、何
かあったのかと、急いで寮に戻った。

だが、寮に戻って部屋に行くと誰も居なかった。

「ん？夕飯でも食ってたのか？」

食堂に行くと、案の定メアリーは友人たちとお喋りをしながら夕飯

を食べていた。

ダニエルはメアリーに近づこうと、食堂に入った。が、そこで自分も友人に呼び止められた。

「よ！ダニエルお前今日どうしたん？」

「あ？なんでもねえよ。」

「それより、夕飯まだだろ、こっち来て一緒に食おうぜ。」

「あゝ…」

今、メアリーと話さなくても後でも平気かと思って、昼も食べてなかったので先に食べることにした。

席を友人に取ってもらい、自分は二人分のご飯を取ると、確保した席に着いた。

その時すでにメアリーが、席を立っていたことに気づいていなかった。

「なあ、お前どうしたんだよ？喧嘩したのか？」

「は？どうしたって何が？喧嘩って誰と？」

「スミスさんとだよ。今日お前授業に全然出なかったから、喧嘩したのかと…」

「別にいつも同じ感じだったし…（でもないか・・・？）」

「え？でもお前等、ペア解消するんだろ？」

「はあ？なんだそりゃ？なんだ、そのデタラメな話は…？」

「えゝ？でも、今日俺らの土と風の演習来てたぜ？これって変更するのかなゝって。」

「……！！」

目を見開いてこちらを見ていた様子を見ると、初めて聞かされたようだ。

ダニエルは、先ほどメアリーが座っていた席を見やると違う人間が座っていたことに、愕然とし、すっと席に戻った。

「初めて聞いたのか？」

「ああ…」

「でもさー。属性変えるの分かる気がするぜ。俺は。」

「何でだよ！？」

椅子から勢いよく立ち上がると、友達の胸座を思いつきりんだ。

またか・・・という目線を送りながら、そのままの体勢でさとするように話を続けた。

「…お前さ、あの人かなり人気あるの知らないだろ？」

「そうなのか？」

「だよ。優しくて、頭が良くて、面倒見が良くて、綺麗とくれば誰でも憧れるって。

それ、気にしてないのお前だけだよ。」

「でも、あいつがモテてるとこ見たこと無いぞ？」

友の意外な言葉に目を丸くしながら、疑いの眼差しで見た。

「お前とゆー凶暴な瘤がくっ付いてたら、誰だって声かけられないっつーの。」

ダニエルの手を外し、衣服を整えながら、横目でダニエルを見た。

「俺だってお前と友達だつて言うとなまに、近寄られなくなるときあるからな。」

差し詰め、歩く凶器。いや、歩く核爆弾だな。」

「そこまで、言うか、普通？」

じとーっと恨めし顔で見やった。

「言われなくなったら、もっと自覚しろ。俺が盗るぞ？」

「な！！何言つてんだよ！？お前パートナーどうする気だよ？」

「おっ、お前にしちゃ、まともな意見だな。」

「からかうな！」

「ただの脅しだ。でも、まじでパートナー変更されたらどうすんだ？あの人狙ってる奴いっぱい居るからな、向こうはいいよ？」

問題はお前だよ。誰がお前と組みたがるんだよ？俺だってパートナーは願ひ下げだぜ。お前とは。

授業はサボるし、直ぐ喧嘩はするし、物は破壊するは、真面目じゃないわで良い所無しじゃん。お前。」

周りは、ダニエルがここまで言い伏せられてるのを初めて見て、感嘆するのと同時に、何時暴れだすかビクビクしながら、すぐに食堂から出たい一心で夕飯をかきこんでいた。

ダニエルの隣で食べていた人は、顔が真っ青になって周りに助けを求める視線を流しながら、次がどうなるのか震えながら固まっていた。

「…はあ、俺もう上行く…」

「あ？おい？！まだ、残ってるぜ？」

「お前にやる…」

さっきの言葉にノックアウトされたのか、ふらふらとしながら食堂を出た。

「めつずらし〜。凹んでる。（ぼそ）」

「なあ、お前凄いな！あれに反抗出来るのってあんまり居ないから

な〜。」

周りから、あれと呼ばれたダニエルが居なくなるとわらわらと近寄ってきた。

（やっぱり、矯正しないと友達出来ないな…）

そう思いながら、周りの友人たちに気の無い返事を返ししながら、どうするか考え始めた。

そうして、自分の部屋に戻ったダニエルは、意気消沈でベットに倒れこんだ。そして悶々と考え出した。

（なんで、あいつ俺に何にも言わないんだよ！そもそも、あいつは俺をパートナーとして見てるのか？！）

いつもは自信過剰だが、落ち込み出したらとことんどん底まで落ち込むタイプで、延々と考え込んでいた。

だが、急にガバツと起き出して、部屋を出た。

急いで、メアリーの部屋へ行くとちよつと強めにノックをした。

「…まだ戻ってないのか？」

何度も叩いても誰も出ないので、隣の部屋のドアを叩いた。

「はい？…きゃあ！」

開けたと同時に閉められそうになって、ダニエルはとっさに手を出してしまった。

どこん！！と、豪快な音がして相手は慌てて、ドアノブを放した。

「あの、ごめんなさい。すいません。すいませんでした！！！！！」

土下座をしそうな勢いで、謝ってきた相手に顔を向けた。

「別にいい。俺が手を勝手に出したんだし。それよりメアリー知らないか？」

殺されるかと思っていたが、相手が許したことにびっくりして、目を丸くしながらそわそわと答えだした。

「あ、なんか。誰かとさっき中庭に行きましたよ……」

「そっか、ありがと。」

「いいえ。」

そしてそのまま、中庭に直行した。

中庭に着くと、メアリーの姿を探してキョロキョロし始めた。

あまりランプの光が届かない所から人の話し声が聞こえた。

そこにそっと近づくと、見えないところに隠れて様子を伺った。

案の定、メアリーと男が話しこんでいた。

（てか、何で俺こんなところでコソコソしてんだよ！あいつが誰かと居ようと関係ないじゃん。

馬鹿馬鹿しい！さつさと、パートナーの件聞けばそれで終わりじゃねーか。）

「話ってなんですか？何かお困りですか？誰か居る所じゃ言えないってことは。」

メアリーが、急に聞いてきたので、びっくりしたが相手が違ってほつとした。

「あゝ。あのさ、噂で聞いたんだけど、あのダニエルとパートナー辞めるって本当？」

「え？」

なんで、相談しにきたのにそんなこと質問されるのかと思って、怪訝に思いながら相手を見た。

「あのさ、俺今年三年で、君より一個上だけど、君と組みたいんだ！今のパートナーとは馬が合わないんだ。

君となら、ここを出てからもきつといいパートナー同士でいられると思うんだ！駄目かな？」

そんな臭いセリフを言いながら、メアリーの手をとって顔を近づけ、

今にも抱き寄せそうな男を見るなり、
『ぶちん。』ダニエルは自分の中で何かが切れた音が聞こえた（よ
ーな気がした）。

「駄目に決まってんだろーが！！何口走ってんだ！くそ野郎！！」
木の陰から噂の本人が出てきて、メアリーは男の間に割って入っ
てきたダニエルと上級生の二人を見やった。

「さげんな！帰れ！さっさと失せろ！」

目を吊り上げて、威嚇するダニエルに怯えて上級生は「ひっ！」と
叫ぶなり、さっさと逃げてしまった。

二人を傍観していたメアリーは、ああゆう人が、君を守ってあげる。
とかくっさいセリフを言って、危険が迫ったら自分だけ逃げるん
だろうな。とか思ってたたり…

「おい！あの事ほんとかよ！？」

「あのことって？」

「俺とパートナー辞めるのだよ！」

「ああ、あれ。貴方には関係無いじゃない。もう少しでいい人捕ま
えられたかもしれないのに。」

「なんだよ？急に！？それにあんなのがお前いいのか！？」

「あら？貴方が勝手にしろ。って言ったのよ？だから勝手にさせて
いただいてるの？」

何か私間違ったこと言ってる？」

「いや、言っただけど…でも…」

「でも、何よ？それに、私とパートナー組むの嫌なんでしょ？」

「嫌じゃない！！」

思ったより自分の声がでかくて、ぱつと口を噤んだ。それよりもび
っくりしていたのは、メアリーだった。

「本当に？どこが？なんで？急にどうしたの？」

ニヤニヤと意地悪そうに聞いてきた。

「あつ。あのな…その…」

耳まで真っ赤にしながら、言いよどんだ。

「ああ、やっぱり私のこと嫌いなのね！」

メアリーは少し芝居がかった口調で、泣き真似をしながらダニエル
をからかった。

パニックになってるダニエルは、本当にメアリーが泣き出したのか
と思って、また反射的に

「嫌いじゃない！」

と叫んでいた。

「嫌いじゃなかったら、なあ〜に？」

横から見たメアリーの目が笑っていたのをみて、しまった！誘導尋問だった！

ここにきて気付いて慌てて逃げようとした。

だがそれにメアリーが気付いて手を握った。

「ここで言うてくれなきゃ、パートナー破棄するわよ。」

ぼそつと言われて、参ったとばかりに振り返った。

「一度しか言わねーからな！」

好きだ。俺とパートナーでいてくれ。

…これでいいだろ?!」

もう、首の辺りまで真っ赤だった。

「いいよ。やつと言ってくれたよね。いつになるかと思ったけど、案外早いものね。」

仕掛けてから1日しかたってないのに。」

「仕掛けてって?!今日起こしに来なかったのはまだいいとして、他人使ったのか？」

さっきの上級生まで仕掛けか？」

「違うわよ。あれは偶然よ。仕掛けたのは友達によ、貴方のね。でも、頼んだのはパートナー変更したいの。って言ってたよって伝えて欲しいって言っただけよ。」

握った手に生暖かいものが触れて、下を見たメアリーは叫んでいた。

「きゃあ！この手どうしたの？血出てるじゃない！」

大袈裟に騒ぎすぎだと思って手を見たら、かなり大量に血が滴り落ちていた。

気が動転していて、痛みなど感じなかったのだ。

「ああ、さっきドアに手を挟んだ。気付かんかった…」

「もう、ドジ！間抜け！なんでこんなに血が出るのに気づかないのよ！手貸して！」

やはり、告んなきゃ良かったかと少し思った・・・が魔法を熱心にかけているメアリーを見てやっぱり、言っというて良かったかもなんて思っているダニエルの負けだ。

傷が塞がったので手を離れたが、反対にダニエルがメアリーの手を取って傍に抱き寄せた。

「お前はどう思ってるの？俺だけじゃズルイぞ。」

につこりと笑うと、「大好きだよ。最初にパートナー組まされたと

きから。」

素直に認めて、いつから好きだったのかも知らされて、また赤くなつたダニエルの頬に口を近づけたとき、

「よー！お二人さん！なんだ。もう仲直りしたのかよ！あら、いいとこだったのね…」

えっと…怒っちゃやーよ（はあと）ははは…」

「失せるっ」

逃げた友を追ってダニエルは走っていった。

「まったく。友達追う振りして逃げたか・・・まあ、いつか。続きはまたいつかでも。」

でも先生の言った通りにしてみても良かった」

そうこの騒動、先生の提案だったのだ。恐るべし先生！

そしてこのゲームの勝者はメアリーで。

この後ダニエルとメアリーは…やっぱりドタバタ騒ぎでいつも通りにラブラブ？になりましたとき。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1406e/>

People following order

2010年11月20日21時35分発行